



Title	ダイクシス表現の分類における人称の位置づけについて
Author(s)	瀧田, 恵巳
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2024, 1, p. 99-133
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94801
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ダイクシス表現の分類における人称の位置づけについて

瀧田 恵巳

キーワード：ダイクシス、人称、原点 (Origo)、次元、対立型と融合型

1. はじめに

1.1 問題提起と本論文の構成

日本語のコソアドは二つの意味基準を軸に分類されることがある。その基準の一つは主として自分と指示対象の関係を表す指示関係の基準であり、もう一つは場所や物など指示対象の属性を表す基準である。この分類方法は木村（1992）の日中対照研究やドイツ語のダイクシス研究にも見られ、日本語の枠を超えた汎用性が認められる。しかしその人称の位置づけは異なる。井出（1958）及び岡村（1972）の分類における人称は指示関係にほぼ一致するが、Sennholz（1985）及びDiewald（1991）によるドイツ語のダイクシス表現の分類では人称は指示対象の属性に位置づけられている。

こうした人称の位置づけの違いはなぜ生じ、またどの位置づけが適切なのだろうか。

本論文では、1.2で主要概念と研究対象を規定したうえで、2で上記の学説における人称の位置づけの相違を示し、3でその要因を考察し、4では対立型と融合型、及び時間表現も取り入れ、日本語のダイクシス表現の分類体系を再構築し、5でまとめと今後の課題を提示する¹⁾。

1) 本論文は瀧田（2022）で論じた内容をもとにさらに考察し発展させたものである。なお本論文のSennholz（1985）とDiewald（1991）の日本語訳はすべて本論文著者によるものであるため、その記載は省略する。Bühler（1934/1982）に関しては本論文著者による翻訳である場合はその旨を記載し、参考文献の『言語理論』上巻及び下巻による場合は「上」及び「下」の後にそのページ数を記すのものとす。

1.2 主要概念と研究対象

1.2.1 ダイクシス、原点、ダイクシス対象

主要概念の一つであるダイクシスは、ここで扱う Sennholz (1985) と Diewald (1991) を基盤に規定する。Sennholz (1985) は複雑なダイクシス現象の定義にあたり、その煩雑さを避けるために、次の見通しのきく短い定義の後に細則を補足するという二段階の手法をとる。

(1) ダイクシスとは、特定の表現に結び付けられた言語特性である。その特性とはある事態を二価の方向関係（矢印関係）によって発話状況に固定するというもので、方向の起点は発話の場所・時・担い手に位置づけられ、方向の目標は事態の場所・時・担い手となる。

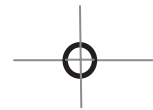
(Sennholz 1985:7)

Sennholz (1985:7) は、(1) の重要な細則として、方向関係の出発点が「原点 Origo」で目標が「ダイクシス対象 Deixisobjekt」である点を補足し、ダイクシスとは、ある事態を、発話の場所・時・担い手に具現される原点を出発点とし、事態の場所・時・担い手に具現されるダイクシス対象を目標とする方向関係によって発話状況に位置づける言語特性であるとする。

Diewald (1991:1) はダイクシスを暫定的に、原点を出発点にした言語外要素の位置づけによる言語的指示と定義し、ダイクシスの過程を「反射的関与」（起点である「原点」へ戻る結合）と「指示的関与」（目標及び「ダイクシス対象」への指示）という二つの局面に分析する。

ダイクシスの定義に不可欠な「原点 Origo」は、Bühler (1934/1982) によって提唱された概念であり、その名称は、次の引用に見られるように、まず指示場を座標に見立てて指示場の中心を座標の「原点」とすることに由来する。

(2) Zwei Striche auf dem Papier, die sich senkrecht schneiden, sollen uns ein Koordinatensystem andeuten, O die Origo, den Koordinatenausgangspunkt:



Ich behaupte, daß drei Zeigwörter an die Stelle von O gesetzt werden müssen, wenn dies Schema das Zeigfeld der menschlichen Sprache repräsentieren soll, nämlich die Zeigwörter *hier*, *jetzt* und *ich*.

紙の上の垂直に交わる二直線は座標体系を、O は原点、即ち座標の出発点を示唆するものとする。

この図式が人間の言語の指示場を表示するとすれば、三つの指示詞がOの代わりに据

えられなくてはならないというのが私の主張である。その三つの指示詞が「ここ hier、今 jetzt、私 ich」というわけである。

（Bühler 1934/1982:102 日本語訳は本論文著者による）

（2）の説明において、原点は発話の場所・時・担い手（話し手）に結びつけられるが、この点に関して Sennholz（1985:15）は、原点を具体的な発話の場所・時・担い手とは異なる理論的な前提とし、ダイクシス関係をその出発点として発話状況に固定する機能を果たすものとする。Diewald（1991:31）も同様に、原点は抽象概念であり、「ここ hier、今 jetzt、私 ich」という3つの指示詞と同一視してはならないとする。また Diewald（1991:27-30）によると、原点は移動変換が可能であり、それは話し手によって指定される。その一例として、向かい合った体操をしている人に「前進、後退、右むけ右、左むけ左」と号令をかける際、相手の定位体系に合わせるという Bühler（1934/1982:103）による事例が挙げられる。

本論文ではダイクシス理論の抽象概念である原点とダイクシス対象という術語を取り入れ、先述の Sennholz（1985）の定義をもとに、ダイクシスを次のように定義する。

（3）ダイクシスとは、ある事態を、起点を原点とし目標をダイクシス対象とする二価の方向関係（矢印関係）によって発話状況に固定する言語特性で、特定の言語表現に結び付いている。

なおダイクシス対象は、言葉によって指示される対象であることから、発話によって意図された語用論的な指示対象とは次の点で区別される。Fricke（2007:89, 135）によると、例えば地図上の一点をさして「ここ」と言う場合、「ここ」によって指示されるダイクシス対象は地図上の一点で、意図された指示対象は実際の現場である。また照応ではダイクシス対象は先行詞で、意図された指示対象は照応詞と先行詞による表現内容である（同書、p.119）。ダイクシス対象と指示対象は概して一致するが、仲介物の存在があれば区別される。

1.2.2 次元、人称、研究対象の限定

Sennholz（1985:8）はダイクシスには場所的・時間的・人称的領域という三つの領域があるとし、これらを Bühler（1934/1982:102）が原点を三次元座標の0点とする構想から出立して「次元 Dimension」と呼ぶ。語用論的なレベルにおいて場所次元は「発話の場—事態の場」、時間次元は「発話時—事態時」、人称次元は「発話の担い手—事態の担い手」というペアで表現される。先述の「原点—ダイクシス対象」は、次元に対して中立的な理論上のペアである。

人称は、ダイクシスの観点からいえば、発話関与者という役割によって弁別される。そのため本来は一人称（自称）と二人称（対称）に限定される。バンヴェニスト（1983:206）によると、これら二つの人称は「含意された一人の人物と、その人物についての話 discours とが同時に存在」する。「わたし」は発話者と同時に「わたし」に関する言表であり、「あなた」は「わたし」によって指示された「話しかけられる者」で、話の外には存在しない。それに対して三人称の言表は「わたしーあなた」の外にあるため「非一人称」とされる。Sennholz（1985）及びDiewald（1991）も、人称を一人称及び二人称のみとする。しかし見方を変えれば、「非一人称」も人称を前提とした範疇である。バンヴェニスト（1983:208）は「かれ」の他に「もの」も三人称とするが、井出（1958）と岡村（1972）は「わたし、あなた」に対応する他称を「かれ、かのじょ」とし、これらを全て「人」という範疇概念に収めている。仁田（1991:24-25）も、三人称の「彼、彼女」を一人称と二人称に対立させて人称制限を論じている。このように人称において「彼・彼女」が一人称と二人称に対峙するのは、「彼、彼女」の指示対象が「もの」とは異なり人称の弁別の特徴である発話の役割を担う能力を有しているからだと考えられる。そこで本論文では発話能力という共通点を取り入れて、人称を次のように定義する。

- (4) 人称とは、発話の役割を担う能力の所有を前提とするダイクシスの範疇で、発話の役割によって、発話の送り手として機能する自分を指し示す自称（一人称）、発話の受け手として機能する相手を指し示す対称（二人称）、発話の役割を担わない者のうち特定の者を指す他称と、不特定の者を指す不定称に弁別される。

上記の「送り手」と「受け手」はBühler（1934/1982:28）の言語オルガノン・モデルに由来し、Sender「送り手」（上 33）は話し手や書き手を含む発信者全般を表し、Empfänger「受け手」（上 33）は聞き手や読み手を含む受信者全般を表す。また日本語の自称詞、対称詞には親族名称や職業名、固有名詞も含まれるが、ここでは話の役割に特化された代名詞を中心に扱う。

なお本論文では日本語とドイツ語のダイクシス表現を扱うが、日本語の時間次元に関して、動詞の時制と原点の移動変換に関しては紙面の都合により言及するにとどめる。また日本語

のコソアドのうちド系は不定称という非典型的な指示詞である²⁾ことから、コソアとの関連でのみ扱う。

2. 各説の分類体系

2.1 佐久間（1983）

佐久間（1983:7）によるコソアドの分類は、次のように二つの意味基準によって成立している。

	もの	方角	場所	もの・人（卑）	性状	指定	容子
“近称”	コレ	コチラ コッチ	ココ	コイツ	コンナ	コノ	コー
“中称”	ソレ	ソチラ ソッチ	ソコ	ソイツ	ソンナ	ソノ	ソー
“遠称”	アレ	アチラ アッチ	アソコ	アイツ	アンナ	アノ	アー
不定称	ドレ	ドチラ ドッチ	ドコ	ドイツ	ドンナ	ドノ	ドー

表1 佐久間（1983:7）によるこそあどの分類（一部改変³⁾）

縦軸の基準は、「自己を中心として「もの」または「こと」がどういう位置をとり、どの方向にあり、どういう有様を呈しているか」（同書、p.6）を示すことから、指示関係に該当する。その下位分類（近称、中称、遠称、不定称）⁴⁾は話し相手との関係における人代名詞の称格（自称、対称、他称、不定称）に対応する。表中の「近称、中称、遠称」の引用符は、この三分類が必ずしも距離によるとは限らないことを示している（同書、pp.19-27）。

横軸の基準は指示される対象の大まかな属性を表す。その下位範疇は指示対象が事物であるか状態であるかによって区別され、「もの」、「人（卑称）」にとどまらず、「性状」「指定」「容子」なども含まれる。これらは品詞の点で名詞の範疇には収まらないため、佐久間（1983:7-13）

2) 山田（1908:192-196）は不定称の用法として、第一に不確定に漠然と指示し「皆、全て」と同意となる「汎称」（例「つまとりの里云々いづれもをかし（枕草子）」）、第二にその多数のうち一つを選択する意図があるが反語による否定で「汎称」にもなる「選択」（例「世の中は何か常なる（古今集）」）、第三に不明なる実体を指示する疑惑質問を陳述する用法（例「いづかたにゆきかくれなむ（拾遺集）」）を挙げている（強調は原著者による）。岡村（1972:114-115）は、「汎称」は各位置づけの選択を放棄する用法、「選択」は選択の不定として、選択を前提とすることから指示詞の機能に数え入れるが、第三の疑問詞としての用法は指示の場は初めから構成されないものとして指示語から除外する。それに対して三上（1955/1972:181）は、疑問称には指す対象を探そうとする意向が含まれるとして指示詞に取り入れている。

3) 本論文ではレイアウトの都合により、原典の縦書きを横書きに変更した。

4) 古田（1980/1992:15）によると、「近称、中称、遠称、不定称」の名称による分類は大槻文彦の『語法指南』（1889）に見られる。また古田（1980/1992:17-24）は、アストン（W. G. Aston）の A Grammar of the Japanese Written Language 第二版（1877）が初めてコソアを人称に関連付けたと指摘している。

は、こそあどの名称として当時一般的であった「代名詞」という名称を不適切とし、「こそあど」、「指す語」、「指示詞」と呼ぶ。

佐久間（1983:33-34）は、「こ・そ・あ」を他称に、「ど」を不定称とすべきかという問題に対して、「人称」は「ヨーロッパ語法から借用し」たもので、日本語には対応する動詞変化形が無いことから、「いわゆる指示代名詞をむりに第三人称として取りあげる必要もな」という見解を示す。佐久間（1983:34-35）は「はなしの現場をかえりみる」という観点から、コソアの領域を（5）のように規定する。この見解に基づいて、佐久間（1983:35-36）は、話し手や相手を指示関係とし、「対話者の層」と「所属事物の層」を指示対象の属性とする表2を提示する。

- （5）話し手とその相手との相対して立つところに、現実のはなしの場ができます。その場は、まず話し手と相手との両極によって分節して、いわば「なわばり」ができ、その分界も自然にきまって来ます。（中略）「これ」は話し手自身の勢力範囲に属します。（中略）これを「わのなわばり」といってもいいわけです。これに対して、「それ」は相手の勢力範囲の中のものをさしているので、（中略）「なのなわばり」の属しているということが出来ます。（中略）これをそれぞれ（コ）と（ソ）で代表させますと、それ以外の範囲はすべて（ア）に属します。（佐久間 1983:34-35）

	指示されるもの	
	対話者の層	所属事物の層
話し手	（話し手自身） ワタクシ ワタシ	（話し手所属のもの） コ系
相手	（話しかけの目標） アナタ オマエ	（相手所属のもの） ソ系
はたの人・もの	（第三者） （アノヒト）	（はたのもの） ア系
不定	ドナタ ダレ	ド系

表2 佐久間（1983:35）による人称表現とコソアドの分類（一部改変⁵⁾）

佐久間（1983:37）はコ系が自称詞（一人称）、ソ系が対称詞（二人称）に転用されることを指摘するが、こうした現象は上記のコソアドと人称表現の対応関係により説明することができる。しかしこの対応関係を統括する「話し手」「相手」等の意味基準そのものが、人称次元に依存するため、コソアドと人称表現の共通点は不明である。また話し手と相手は事物の所属先であるが、はたの人（アノヒト）や不定（ドナタ）は事物の所属先とはいえない。

5) 本論文ではレイアウトの都合により、原典の縦書きを横書きに変更した。

2.2 井出（1958）

井出（1958）が提唱する「関係概念」と「範疇概念」は、二つの意味基準の名称に該当する。井出（1958）は、「代名詞」が「話者との関係概念の表現という主観的な表現と範疇概念の提示という客観的な表現とを二つながら含むことによって、特定の事物・属性を限定して指示することができる」（同書、p.113）とし、人称の下位分類「自称」「対称」「他称」を関係概念の下位分類として、コソアドと「代名詞」を次のマトリックスで表示する（同書、pp.115-116）。

		関係 範疇	自称	対称	他称			
					近称	中称	遠称	不定称
人代名詞	名詞的	人	ワタクシ	アナタ	コノカタ	ソノカタ	アノカタ	ドノカタ ドナタ
			ワタシ ボク	キミ	(カレ・カノジョ)			
			オレ	オマエ	コイツ	ソイツ	アイツ	ドイツ
指示代名詞		事物			コレ (コ)	ソレ (ソ)	アレ (ア)	ドレ (ド)
		場所			ココ	ソコ	アソコ	ドコ
		方角			コッチ コチラ	ソッチ ソチラ	アッチ アチラ	ドッチ ドチラ
	副詞的	情態			コウ	ソウ	アア	ドウ
	形容動詞的				コンナダ	ソンナダ	アンナダ	ドンナダ
	連体詞的	もの こと			コノ	ソノ	アノ	ドノ

表3 井出（1958:115-116）（一部改変⁶⁾）

この表で「自称」「対称」を占める範疇概念は「人」のみであり、佐久間（1983）の指摘するコ系とソ系による自称詞と対称詞への転用の可能性は表示されていない。また「人」の範疇には「自称、対称、他称」という発話の役割による弁別と「近称、中称、遠称、不定称」という距離による弁別が共存するのに対して、他の範疇では後者の弁別のみが機能する。

2.3 岡村（1972）

岡村（1972）は、井出（1958）の名称を踏襲し、関係概念を話し手が表現するものごと（「素材」）と話し手が意識する「自分」との関係のしかたであり、範疇概念を「素材」を範疇化

6) 本論文では原典の縦書きを横書きに変更し、表中の「本文引用の略称」の欄を削除した。

してとらえた大まかな質の差であるとする⁷⁾。

関係 範疇	自称	対称	定称			不定称	構文上の 特徴
			他称				
			近称	中称	遠称		
人	わたくし わたし ぼく	あなた おまえ きみ	かれ	かのじょ	やつ	(だれ)	名詞的
			このかた このひと こいつ	そのかた そのひと そいつ	あのかた あのひと あいつ	どなた どいつ	
			(こ) これ こいつ	(そ) それ そいつ	(あ) あれ あいつ	(ど) どれ どいつ	
物事							
場所			ここ	そこ	あそこ	(どこ)	
方角			こちら こっち	そちら そっち	あちら あっち	どちら どっち	
状態			こう	そう	ああ	どう	副詞的
			こんな こういう こうした	そんな そういう そうした	あんな ああいう ああした	どんな どういう どうした	連体詞的
ナシ			この	その	あの	どの	

表4 岡村 (1972:107-108) (一部改変⁸⁾)

岡村 (1972) の分類は、井出 (1958) とは次の点で異なる。関係概念は「定称」と「不定称」に大別され、「定称」は「自称」「対称」「他称」に分けられ、「他称」は「近称」、「中称」、「遠称」に細分される。「他称」はさらに第一類と第二類に大別される。第一類はいわゆる「三人称」に相当し、場において自分自身としてとらえる「自分」と聞き手としてとらえる「相手」以外のもので、所属領域が関与しない「かれ、かのじょ、やつ」が分類される。第二類には、「自分」と「相手」の所属領域が関与するものとしてコソアが分類される。

表4では、井出 (1958) の表3と同様、範疇概念「人」においてのみ「自称」「対称」は占める語彙があり、他の範疇にはない発話の役割という弁別が介入する。またコ系で話し手、ソ系で聞き手を指すという人称とコソアの関連性も示されていない。

7) 正保 (1981:61) も井出 (1958)、岡村 (1972) の見解を踏襲し、この二つの概念が分かちがたく融合して指示詞の意義を構成しており、佐久間 (1983) の表1に示されるコソアドの体系は話し手との関係概念と指示対象の範疇概念を併せて表示したものであるとする。

8) 本論文では原典の縦書きを横書きに変更した。

2.4 Sennholz (1985)

ドイツ語圏のダイクシス研究の一つである Sennholz (1985) は、ダイクシスを二つの基準（「関係タイプ Relationstyp」と「次元 Dimension」）に従って、次の六つに分類する。

関係タイプ \ 次元	場所ダイクシス	時間ダイクシス	人称ダイクシス
自己ダイクシス	場所自己ダイクシス hier 「ここ」	時間自己ダイクシス jetzt 「今」	人称自己ダイクシス ich 「私」
非自己ダイクシス	場所非自己ダイクシス da 「そこ」	時間非自己ダイクシス morgen 「明日」、 früher 「かつて」	人称非自己ダイクシス du 「君」

表 5 Sennholz (1985:43) によるダイクシスの分類（一部改変⁹⁾）

縦軸の「関係タイプ」は「自己ダイクシス Autodeixis」と「非自己ダイクシス Heterodeixis」から成る¹⁰⁾。「自己ダイクシス」は、ダイクシス関係の出発点である「原点」と目標であるダイクシス対象が一致する関係である (Sennholz 1985:46-47)。例えば Bühler (1934/1982:102) が原点の代わりとする指示語「ここ hier、今 jetzt、私 ich」は、原点を表すと同時にダイクシス対象にも一致する。これに対して「非自己ダイクシス」には、原点とダイクシス対象が一致しない表現、例えば発話者の領域以外の場所を指す da 「そこ」、発話時以外の時を指す morgen 「明日」や früher 「以前」、発話者以外の発話関与者を表す du 「君」が分類される。

横軸の「次元」には、三つの下位範疇「場所ダイクシス Lokaldeixis」¹¹⁾、「時間ダイクシス Temporaldeixis」、「人称ダイクシス Personaldeixis」がある。Sennholz (1985:43) によると、

9) この表は Sennholz (1985:43) の表に基づき作成し、本論文著者が例と日本語訳を補足した。

10) 本来 Heterodeixis は「異種ダイクシス」であるが、Autodeixis 「自己ダイクシス」との対立関係を考慮して「非自己ダイクシス」と翻訳した。

11) 瀧田 (2022) では時間との相関関係を考慮して Lokaldeixis の訳語を「空間ダイクシス」とした。本論文では今後の次元の拡大を鑑み、原語に忠実でより具体的な「場所ダイクシス」という日本語訳を用いる。これに伴い lokal を「場所（的な）」と翻訳する。

これら三つの「次元」は当時の比較的新しい文献¹²⁾に共通して見られる。「次元」という名称は、場所ダイクシスの「三次元性 Dreidimensionalität」、時間ダイクシスの「一次元性 Eindimensionalität」という物理的な属性、人称ダイクシスの物理的な属性の無い「ゼロ次元性 Nulldimensionalität」、もしくは物理的な次元を否定する「非次元性 Adimensionalität」に由来する (Sennholz 1985:148)¹³⁾。

縦軸の「関係タイプ」は原点とダイクシス対象との関係に基づく点で指示関係と見なされる。これは井出 (1958) 及び岡村 (1972) の「関係概念」に相当する。横軸の「次元」は指示対象の属性を表す「範疇概念」に該当する。人称は井出 (1958) 及び岡村 (1972) では「関係概念」に属するのに対して、Sennholz (1985) においては「範疇概念」に相当する「次元」に属する。

2.5 Diewald (1991)

同じくドイツ語圏のダイクシス研究である Diewald (1991) は、指示関係と指示対象の属性という二つの基準を Sennholz (1985) とは別の理論的枠組みで捉える¹⁴⁾。

Diewald (1991:1) は、ダイクシス理論の基盤として、指示的構成要素と命名的構成要素の双方から成る「ダイクシス過程 deiktischer Prozeß」を導入する。ダイクシス過程の指示的構成要素とはコンテクストに結合した方向関係であり、ダイクシスの起点である原点へ戻る「再帰的関与 reflexiver Bezug」とダイクシスの目標であるダイクシス対象へ向かう「指示的関与 demonstrativer Bezug」の二つの局面に分けられる。それに対して命名的構成要素は二つの意味論的軸「距離 Entfernung」と「次元 Dimension」から成る。「距離」とは原点とダイクシス対象間の隔たりで指示的傾向が強く、原点の有無によって「原点含有段階

12) この点に関して Sennholz (1985:43) は、Braunmüller (1977)、Fillmore (1966, 1972)、Harweg (1976)、Weinreich (1963) などを挙げている。Fillmore (1966:220) は、人、場、時は come と there が共起する事例の解説に不可欠なレフェレンスの対象とし、発話に対して相対的に解釈されるこれらの言語的局面をダイクシスと呼ぶ。Fillmore (1972:147) はダイクシスの名称で伝統的に扱われる局面として、対話者のアイデンティティが関与する「人称ダイクシス」、コミュニケーション行為が起る時が関与する「時間ダイクシス」、コミュニケーション行為の時点での対話者の空間的位置づけが関与する「場所ダイクシス」を挙げる。さらに包括的・拡張的記述として「談話ダイクシス Rededeixis」、及び対話者間の社会的関係を反映した表現も考慮の対象としており、この方針は Fillmore (1997) にも継承されている。Braunmüller (1977:117) もまた Fillmore (1972) と同様、包括的なダイクシスの記述については伝統的な場所、時間、人称に加え談話ダイクシスを取り入れる。Harweg (1976:329) は、当時の文献では Bühler (1934/1982) の原点の代わりとなる三つの指示語「ここ hier」「今 jetzt」「私 ich」を踏襲し、自らの理論的枠組みにおいても「場所ダイクシス lokale Deixis」、「時間ダイクシス temporale Deixis」、「人称ダイクシス personale Deixis」を対立させる。Weinreich (1963:154ff.) は、ダイクシスにおいて用いられる発話状況の第一の要素を、談話における発話者（一人称）もしくは受信者（二人称）、談話の時（時制）そしてその場所とする。

13) Sennholz (1985) に関しては、渡辺 (2009:170-173) も参照されたい。

14) Diewald (1991) のダイクシス理論については瀧田 (2005) も参照されたい。

origoinklusive Stufe」と「原点非含有段階 origoexklusive Stufe」に分けられる（同書、p.20, pp.33-34）。「次元」はダイクシス対象の種類であり、Diewald（1991:20, 30-33）は、「場所次元 lokale Dimension¹⁵⁾」、「時間次元 temporale Dimension」、「人称次元 personale Dimension」、「もの次元 objektale Dimension」、「モダール次元 modale Dimension」という五つの下位範疇に分類する。Diewald（1991:143-144）が従来の三つの次元（「場所」、「時間」、「人称」）に「もの」と「モダール」を加える理由は、その先験性にある。「場所」と「時間」は先験的に存在し、「人称」もまた各コミュニケーション状況から先験的に与えられる存在である。「もの」もまた言葉以前に存在するか、想像されている。ある事態が事実であるか否かという「モダール」も言葉以前の現象である。これら五つの次元は言語化されるべき本質的かつ恒常的な外界現象とされる（同書、p.144）。Diewald（1991）には存在しないが、命名的構成要素に従ってダイクシス表現は表6のように分類することができる。縦軸の「距離」は原点とダイクシス対象との距離に関連する点で指示関係に該当し、横軸の「次元」は場所や時間等の対象の共通属性に関する基準である。

次元 距離	場所次元	時間次元	人称次元	もの次元	モダール次元
原点含有段階	hier 「(原点を含有する場所としての) ここ」	jetzt 「今」	ich 「私」	dieser 「これ」	[事實的] 直説法
原点非含有段階	dort 「あそこ」	einst 「かつて、いつか」	du 「君」	jener 「あれ」	[非事實的] wahrscheinlich 「おそらく」

表6 Diewald（1991）の命名的構成要素に基づくダイクシス表現の分類¹⁶⁾

Diewald（1991）における人称はSennholz（1985）と同様「次元」に属し、指示対象の属性と見なされている。Sennholz（1985）との相違で特筆すべきは、場所次元の原点非含有段階には du に対応する da 「そこ」ではなく、dort 「あそこ」が挙げられていることである。Diewald（1991:139）によると、hier 「ここ」（近）に対立するのは dort 「あそこ」（遠）であり、da 「そこ」は距離に関して中立的な無標の場所指示詞である。この中立性は、da がコンテキストに存在するものに注意を集中させる「原型指示詞 Archideiktikon」であることに由来する（同書、pp.155-156）。

15) 瀧田（2022）では lokale Dimension を時間との対立を考慮して「空間次元」としたが、本論文では、次元の増設を考慮してより具体的な「場所次元」という訳語を用いる。

16) この表は Diewald（1991）の記述に基づき本論文著者が作成し、例と日本語訳を補足した。

2.6 三上 (1955/1972)

これまで紹介した各説を概観すると、人称は、井出 (1958) 及び岡村 (1972) によるコンソアドの分類において指示関係を示す意味基準に分類され、Sennholz (1985) 及び Diewald (1991) の分類においては次元というダイクシス対象の属性に関わる意味基準に位置づけられる。佐久間 (1983) の表 2 では、人称を指示関係に反映しつつ、「わたし」などの人代名詞を指示対象の属性としてコンソアドと並置するが、コンソアドとの共通特性は明らかにされていない。しかし佐久間 (1983) と同様に人称を指示関係にも指示対象の属性にも取り入れ、且つ Sennholz (1985) 及び Diewald (1991) の分類に共通する特徴を呈するのが、三上 (1955/1972) である。

三上 (1972:170) は代名詞の特徴を以下のように説明する。

- (6) 代名詞は naming を経ずして事物を言表す記号である。概念の助けを借りずに事物を言当てるためには、それを場面に関して方向づける区別がなければならない。このカテゴリーが代名詞の称 (index) である。西洋から来た第一二三人称や、わが近称中称遠称の称である。
(三上 1972:170 強調は本論文著者による)

上記の引用で特徴的なのは、Sennholz (1985) 及び Diewald (1991) がダイクシスの特徴とする「場面に関して方向づける区別」が、人称や近称中称遠称に関連付けられている点である。そのためなのか、「称」にはダイクシスの基軸となる意味特徴「index (指標)」が添えられている。「称 (index)」は、表 7 の通り「求心的」か「離心的」かによって「近称」と「遠称」に分けられ、「中称」は除外されている。「近称」の「求心的」という属性は、「A 称」が相手を中心とし、「H 称」が話し手を中心とすることを示す。この「中心」による分類も Sennholz (1985) と Diewald (1991) の原点による分類に酷似している。ただし Sennholz (1985) と Diewald (1991) では二人称の du「君」が原点を含まない段階とされ、A 称の求心性は認められていない。「遠称」には中心のない「他称」と「疑問称」が属する。

指示対象の属性に関しては、「範疇概念」や「次元」に該当する上位概念の名称はない。その下位範疇「物」、「所」、「方」、「人」のうち、「人」の範疇に人代名詞がリストアップされている。また特に説明はないが、人代名詞の A 称と H 称は平仮名で表記されている。

称	近称（求心的）		遠称（離心的）	
	A 称	H 称	他称	疑問称
物	ソレ ソイツ	コレ コイツ	アレ アイツ	ドレ（何） ドイツ
所	ソコ	ココ	アソコ	（ドコ）
方	ソチラ ソッチ	コチラ コッチ	アチラ アッチ	ドチラ ドッチ
人	あなた おまえ きみ	わたし おれ ぼく	カレ	ドナタ ダレ

表 7 三上（1955/1972:174）によるダイクシス表現の分類（一部改変¹⁷⁾）

三上（1955/1972）において特徴的なのは、指示関係を表す「称」が「人称」の要素を持ちながら、その上位において「中心」という基準により求心的な「近称」と離心的な「遠称」に二分されるという点である。この上位区分がもつ共通特性により、「人」という範疇の人称代名詞を、「物」や「所」などの他の範疇のコソアドと同列に扱うことができるのである。

三上（1955/1972）による表 7 は、その指示関係が Sennholz（1985）及び Diewald（1991）の原点に該当する基準によって区分されることにより、佐久間（1983）の表 2 をさらに精緻化し、また佐久間（1983）の表 1 との統合もある程度は果たしているといえる。

2.7 各説の特徴のまとめ

2 で取り上げた各説においては、表 8 に示されるように、ダイクシス表現の意味基準として指示関係と指示対象の属性が認められるが、人称の位置づけは不統一である。

佐久間（1983）には、自己を中心とした位置関係（近称・中称・遠称）に基づくコソアドの分類（表 1）と話し手と相手に基づく人称表現とコソアドの分類（表 2）があり、後者において人称は指示関係とほぼ同等の役割を果たしている。

井出（1958）と岡村（1972）では、明らかに人称を示す自称／対称が指示関係に該当する「関係概念」に位置づけられ、Sennholz（1985）と Diewald（1991）においては、人称に該当する「人称ダイクシス」及び「人称次元」が指示対象の属性に相当する「次元」に位置づけられている。

三上（1955/1972）において、人称は「称」という「指示関係」に反映される。しかし同時に「指示対象の属性」のひとつである「人」という範疇には人代名詞が分類され、しかも井出（1958）と岡村（1972）とは異なり、コソアド表現（「このひと」等）は含まれない。

17) 本論文ではレイアウトの都合により、原典の縦書きを横書きに変更した。

つまり三上（1955/1972）の「人」に含まれるダイクシス表現は、Sennholz（1985）の「人称ダイクシス」及びDiewald（1991）の「人称次元」等に含まれるダイクシス表現に該当し、いわゆる人称代名詞に特化されている。従って三上（1955/1972）において人称は指示関係と指示対象の属性の双方に位置づけられるという他の先行研究と比較して極めて特殊な体系を構築している。

	指示関係	指示対象の属性
佐久間（1983）（表1） こそあどの分類	近称 / 中称 / 遠称 / 不定称	もの・方角・場所・もの・人（卑称）・性状・指定・容子
佐久間（1983）（表2） 人称表現とこそあどの分類	話し手 / 相手 / はたの人・もの / 不定	対話者の層 / 所属事物の層
井出（1958）（表3）	「関係概念」 自称 / 対称 / 他称 他称→近称 / 中称 / 遠称 / 不定称	「範疇概念」 人 / 事物 / 場所 / 方角 / 情態 もの / こと
岡村（1972）（表4）	「関係概念」 定称と不定称が対立。 定称→自称 / 対称 / 他称 他称→近称 / 中称 / 遠称	「範疇概念」 人 / 物事 / 場所 / 方角 / 状態 ナシ
Sennholz（1985）（表5）	「関係タイプ」 自己ダイクシス / 非自己ダイクシス	「次元」 場所ダイクシス / 時間ダイクシス / 人称ダイクシス
Diewald（1991）（表6）	「距離」 原点含有段階 / 原点非含有段階	「次元」 場所次元 / 時間次元 / 人称次元 / もの次元 / モデル次元
三上（1955/1972）（表7）	「称」 近称（求心的）：A 称 / H 称 遠称（離心的）：他称 / 疑問称	物 / 所 / 方 / 人

表8 各説の二つの基準の対応関係

3. 考察

3では、2の先行研究において人称の位置づけに相違が生じる三つの要因として、原点ないし類似概念の有無、ダイクシスの運用状況における二重性（場面と場）、そして場所や時間にはない人称の特異性を取り上げ考察する。

3.1 原点の有無

人称を指示関係に位置づける井出（1958）及び岡村（1972）に対して、人称を指示対象の属性としてとらえるSennholz（1985）及びDiewald（1991）、そして三上（1955/1972）に見られる顕著な相違点として、原点（またはそれに類する中心）という概念の存在が挙げら

れる。

Sennholz (1985) 及び Diewald (1991)、そして三上 (1955/1972) においては、指示関係が原点に基づく下位範疇（「自己ダイクシス」と「非自己ダイクシス」、「原点含有段階」と「原点非含有段階」、「求心的」と「離心的」）に区分されている。

先述のように原点はダイクシス関係の起点を表す抽象概念であることから、話し手や発話時、発話場所に結びつけられる。いわば原点は、Sennholz (1985:13-14) が指摘するように、場所と時間と人称をつなぐジョイントの役割を果たす。こうした原点という共通概念を指示関係に取り入れることにより、場所と時間と人称を同じ基準で分類し、指示対象の属性として同列に位置づけることが可能になるのである。

3.2 ダイクシス状況の二重性

3.1 において原点に基づく指示関係の分類によって場所と時間と人称の並置が実現することを示した。マトリックスの機能の点から見ると、原点を取り入れ、人称を指示対象の属性としてとらえる方がはるかに効率的である。つまり Sennholz (1985) と Diewald (1991)、及び三上 (1955/1972) の表は全体が満たされているが、井出 (1958) と岡村 (1972) の表では、「自称」「対称」を占めるのは「人」のみで、他の範疇の該当部分は空欄である。

しかし一人称＝話し手、二人称＝聞き手と考えるならば、コソアドで表現される指示対象は三人称と見なされる。その発想に基づくならば、佐久間 (1983) の表2と三上 (1955/1972) の表7のように自称詞とコ系、対称詞とソ系が並置されることは現実にはそぐわないものであり、原点という場所、時間、人称の共通点は仮説にすぎないかのように思われる。

この疑問を解明するには、一人称＝話し手、二人称＝聞き手という認識を掘り下げて考察する必要がある。つまりダイクシス状況においては、実際の現場と叙述される指示場が重複するのである。この二重構造は先行研究において次のように指摘されている。

時枝 (1941/2007) は、「言語は、誰（主体）かが、誰（場面）に、何物（素材）かについて語ることによって成立する」（同書、p.57）ものとし、言語の存在条件として、言語的表現行為の行為者である「主体」（同書、p.58）、聴手¹⁸⁾をも含めてその周囲の一切の主体の指向の対象になるものを含む「場面」（同書、p.61）、「言語によって理解せられる表象、概念、事物」（同書、p.68）である「素材」の三つを挙げる。そのうち「主体」に関して、時枝 (1941/2007:59) は、話し手としての主体と文法上の一人称との違いを次のように指摘する。

18) 時枝 (1941/2007:64-65) によると、場面としての聴手は言語主体である話手に対立し主体の指向の対象となる場合の聴手である。それに対して、言語を聴いてある事物を理解する場合の聴手は言語の存在を経験することから、主体と見なされる。これらと区別した上で第二人称は、場面の素材化されたものとされる（同書、p.63）。

例えば「私は読んだ」という表現においてこの表現をしたものは「私」であるから、この一人称は言語の主体を表しているように考えられる。しかし「私」は、主体そのものではなく、主体の客体化され、素材化されたものである。それは、画家が自画像を描く場合、描かれた自己の像は、描いた主体そのものではなく、主体の客体化・素材化したものであることに等しい。同様に文法上の二人称も場面即ち聴手そのものではなく、聴手の素材化・客体化されたものである。

このように時枝（1941/2007）においては、「主体」対「素材化された一人称」と「場面（聴手を含む）」対「素材化された二人称」が指摘されているが、これらの対立はダイクシス状況における実際の現場と言語による叙述内容という二重構造に該当する。

高橋（1956/1992）は、時枝（1941）の「場面」の概念の主客未分化なところを分化させた永野（1949）等を取り入れ、話し手と聞き手と素材の緊張関係である「客観的立場における場面」と、話し手（または聞き手）の意識における自分と相手と話材との緊張関係である「主体的立場における場面」を区別する。高橋（1956/1992:38）は、名称の利便性と心理学で用いられる用語を考慮して、前者を situation の訳語から「場面」、後者を field の訳語から「場」と呼ぶ。高橋（1956/1992:39）は、話し手の発言は客観的素材に直接結びつくのではなく、主体的立場における話材を媒介にするとし、「場面」と「場」とコソアについて次のように説明する。

- (7) その話材は自分と相手の緊張関係のあらわれでもあるから、「場面」は「場」をへて発言にあらわれる。たとえば話し手と聞き手との中間に素材があるという場面でコソアド系が使われる場合、話し手がその素材を自分に近づけて場を構成する場合にはコ系が発言され、相手に近づけて場を構成する場合にはソ系が発言される。（高橋 1956/1992:39）

時枝（1941/2007）の素材化とは位置づけは異なるものの、高橋（1956/1992）においてもまた実際の現場に相当する「場面」と発言に近い位置を占める「場」が設定されている。高橋（1956/1992）の「場」は、発言に近いという点で時枝（1941/2007）の「素材」に該当する。ダイクシス状況を実際の現場（「場面」）と叙述の対象となる指示場（「場」）の二重構造としてとらえるならば、言語体系における人称の叙述対象は「素材」及び「場」の範疇にあり、叙述対象としての人称間の区別は実際の現場の話し手と聞き手の区別ほど確固たるものではない。このことは本来三人称であるはずの表現で話し手や聞き手を指すことができるという事実にも現れている。Bühler（1934/1982:146-148）（上 172-175）は、現代ドイツ語において一人称代名詞 ich 及び二人称代名詞 du が存在しない場合であっても、例えば「口」を一人称代名詞、「耳」を二人称代名詞として用いることができると指摘する。また日本語

の「僕、君」のような「一人称代名詞」及び「二人称代名詞」が、「下僕」と「君主」に由来することにも言及している。

このように一人称、二人称、三人称という人称の区別は一見明確であるかのように見えるが、「場面」に属する「話し手」、「聞き手」、「それ以外」の区別ほど明確ではない。ゆえに、三人称が一人称と二人称に適用されるコ系とソ系の事例が生じるのである。

3.3 人称の特異性

人称が指示関係に組み入れられる要因として、場所や時間にはない特異性が挙げられる。それは拡張性を持ちにくいということである。

Sennholz (1985:30) によると、場所的指示詞及び時間的指示詞によって指示される場所及び時間は様々な大きさに拡張することができる。例えば「ここ hier」という場所指示詞は、あの世を「あそこ dort」と見立てれば、地球全体を指し示すことができ (Bühler 1934/1982:100) (上 118)、「今 jetzt」という時間指示詞は、地学上の時間尺度で考えるならば、最後の氷河期以降の時代全てを表すこともできる (Bühler 1934/1982:132) (上 156)。

それに対して Sennholz (1985:40-41) は、人称指示詞の場合「私たち (wir, unser 等)」「君たち (ihr, euer 等)」のように複数であれば、二人から不特定多数に至るまでの拡張性は認められるが、場所や時間とは異なり可算的であり、また単数の場合にこの拡張性は認められないとする。人称ダイクシスは、単数を基準とするならば、原則として拡張性を持たないといえる。

人称の非拡張性は、話し手や聞き手を点と見なす構想とも結びつく。

2.4 で示したように Sennholz (1985:148) において、場所ダイクシスには三次元、時間ダイクシスには一次元という属性が付与されるのに対して、人称ダイクシスは物理的な属性の無いゼロ次元、もしくは非次元とされる。岡村 (1972:100) においては、指示の場における自分・相手・第三者を三つの定点とされ、自分と相手はコ系、ソ系の縄張りの中心と見なされる。

人称が拡張性の無い点であるとすれば、それは「原点 Origo」との共通点と見なされる。しかし人称には本当に拡張性が無く、場所や時間と明確に区別されるのだろうか。

Bühler (1934/1982:372-373) によると、Zwei Augen, ach zwei Augen, die kommen mir nicht aus dem Sinn (同書, p.372) 「二つの瞳、ああ、あの忘れえぬ瞳」(下 141) という叙事的な語句について、話し手は確かに送り手としての印「私 ich (文中は mir)」を用いるが、その発言の「私」以上のものを意味している。つまり ich は、その発話の瞬間を超えて存在し、過去と未来を問わず恋に悩んでいる者を意味している。これは Ich-Sphäre (同書, p.373) 「「私」という語の指す範囲」(下 141) の拡大であり、ベルリンのどこかで「ここ

hier」といってベルリン全体を指すのと全く同じであるとする。

このように人称は拡張性のない点と見なされる傾向があり、それが原点に匹敵するものとして指示関係に位置づけられると考えられる。しかし実際には人称にも、場所や時間に比べればわずかとはいえ拡張性が認められ、決して原点と同等の機能を果たすとはいえない。

従ってダイクシス表現の分類において、人称は井出（1958）と岡村（1972）のように指示関係に直接反映すべきものではなく、むしろ Sennholz（1985）と Diewald（1991）のように指示対象の属性に位置づけるのが適切であるといえる。

3.4 要因のまとめと本論文の見解

3では人称の位置づけに相違が生じる要因を明らかにした。

人称が指示関係と見なされる要因は、原点という概念の欠如、場面における明確な区分が場に持ち込まれていること、そして人称が拡張性のない点として捉えられることにある。確かに人称の不完全な非拡張性は、場所と時間と比較するならば、原点に近い特徴である。また Sennholz（1985）と Diewald（1991）における指示関係の下位分類は原点の含有・非含有による二分類しかないが、コソアドの分類には二分類では足りず、自分のみならず相手の役割を加えざるを得ない。三上（1955/1972）が指示関係に人称を反映させたのも、この点にあると考えられる。そこで本論文では、指示関係の第一の分類基準は原点とし、細分する基準として「自分」と「相手」を導入したうえで、人称を指示対象の属性として扱うものとする。

4. ダイクシス表現分類の再構築

4.1 分類の再構築に関わる課題

4では日本語のダイクシス表現の分類の再構築を試みる。3の考察の結果を踏まえ、本論文では Sennholz（1985）及び Diewald（1991）と同様、人称を指示対象の属性とすることから、指示対象の属性として「次元 Dimension」という術語を用いるものとする。分類の対象としては、伝統的な場所次元、時間次元、人称次元の主なダイクシス表現を扱う。指示関係は第一に原点を基準とするが、自分と相手も指示関係を細分する基準として介入させる。

この方針を取るにあたっては、次の課題がある。

本論文は、上記の方針に最も近いことから、三上（1955/1972:174）の表7の分類を再構築の基盤とする。しかし三上（1955/1972:174）の表からは中称のソが除外され、「これまで、これから」や「今日、昨日、明日」といった時間次元のダイクシス表現もまた排除されている。また三上（1955/1972:177-178）は自分と相手の立場によって今日のいわゆる対立型と融合型を区別するが、これらの型は表7の指示関係に反映されていない。

そこで4.2では指示関係に関する課題として、対立型と融合型、及び中称の位置づけを検討し、4.3では次元に関する課題として、時間次元も含めたダイクシス表現の分類を検討する。

4.2 指示関係に基づく分類

4.2.1 対立型と融合型の規定と中称のソの位置づけ

二つの型に先立つものとして、距離区分説と人称区分説という説明原理が存在する。小川（2019:266-267）によると、距離区分説は「話し手からの（心的）距離（近・中・遠）によってコ・ソ・アが使い分けられると説明する」原理であり、人称区分説は「話し手と聞き手の領域を設定し、話し手領域に属するものがコ系、聞き手領域に属するものがソ系、両者の領域の外にあるものがア系で指示されると説明する」原理である。

2.1の佐久間（1983:7）の表1における下位分類（近称、中称、遠称、不定称）は、「自己を中心として「もの」または「こと」がどういう位置をとり、どの方向にあり、どういう有様を呈しているか」（同書、p.6）という距離区分説に基づく。佐久間（1983:35）の表2は、話し手自身の「わのなわばり」に属するものをコ系、相手の「なのなわばり」に属するものをソ系で表すという自分と相手のなわばりの対立が反映される人称区分説に基づく。

コソアの使い分けに関していえば、人称区分説と距離区分説は区別の基準そのものが異なる。前者は自分と相手の対立であり、後者は自分と対象との関係である。それに対して対立型と融合型は、自分と相手の関係の違いに基づく対立である。問題となるのがソの位置づけで、人称区分説におけるソは相手の領域を指すという点で対立型のソとほぼ一致するのに対し、距離区分説における中称のソは、対立型と融合型の間で様々な位置に置かれている。

対立型と融合型という術語は現れないが、対立型と融合型における自分と相手の立場の相違を記述した研究の一つとして、2.6で取り上げた三上（1955/1972, 1970）がある。三上（1970:145）は、コソアは三項対立ではなく、「コレ対ソレ」と「コレ対アレ」の二項対立であるとする。三上（1955/1972:177-178, 1970:145-146）によると、「コレ対ソレ」における相手と自分の立場は楕円形的である。相手と自分が楕円の二つの焦点に立ち、楕円を折半してめいめいの領分（表7の「A称」と「H称」）として向かい合っており、楕円の外側は問題外であるため、アレは現れない。それに対して「コレ対アレ」の場合は、自分と相手が肩を並べる姿勢に変わって接近し、「我々」としてぐるになり、楕円は円になり、円内がコレ的、円外がアレ的となる。楕円的な「コレ対ソレ」は自分と相手の領域が対立することから対立型、円的な「コレ対アレ」は自分と相手の領域が融合することから融合型に該当する。三上（1955/1972:178-180）によると、融合型の円的状况で相手が消えることはないが、「ソレ」の領分は没収され、「ソレ」は指示作用を失った中和中立の中称となり、話し手の指定のままに「移動的に設定された原点」（同書、p.179）として用いられる文脈承前として機能する。

三上（1955/1972, 1970）において対立型はコ対ソ、融合型はコ対アに特化されるが、阪田（1971/1992）と正保（1981）は対立型と融合型の両方にそれぞれコソアの用法を認めている。

阪田（1971/1992）もまた対立型と融合型という術語は用いないが、話し手の自己の領域をコ系、自己の領域外をソ系とする対立型に類する場合と、話し手が聞き手を自分の領域に包み込んで「われわれ」という一つの領域を作る融合型に類する場合を区別する。対立型に相当するケースでは、「話し手は場所的・心理的に身近なものは自己の領域内のものと認め、コ系で指示し、自己の領域外のものとして認めたもの」は相手に近いものであり「なのなわばり」の属するものとしてソ系で指示するとする（同書、p.66）。三上（1955/1972, 1970）で除外されるア系に関しては、「指示されるものが外に現れておらず、話し手の意識の中にある場合」に用いられ、過去を思い出して語る主観的な色合いを帯び、客観的な時間としては隔たりがあるものとして指示する場合にア系が用いられるものとする（阪田 1971/1992:66-67）。融合型に該当するケースでは、「われわれ」の領域内にあるものをコ系、領域外の遠く離れたものをア系で指示するものとする。三上（1955/1972, 1970）で除外されるソ系に関しては、話し手が並んで歩いている相手に向かって、二、三軒先の家を「そこ」で指す例（阪田 1971/1992:57）等を挙げて、「われわれ」の領域外の比較的近いものをソ系で指すと説明する。

堀口（1978/1992）は、ソ系の領域を聞き手の所属領域とする佐久間説を疑問視し、コソアの選択は対象に対する話し手の関わりの方の気持ち次第であり、話し手が聞き手の存在を顧慮した自己抑制により自己に関わりが弱いものとしてソを用いるとする。その観点から、従来の「現場指示」と「文脈指示」を（聞き手を含む）他者に実態を示す状況で行われる指示に限定し、思考語・内言などの他者に実態を示すことのない状況と区別する。そのうえで後者の思考語・内言などの状況で本人が知覚している事物を指示する「知覚対象指示」、及び本人が観念の中に浮かべている事物を指示する「観念対象指示」という下位分類を新たに設ける。堀口（1978/1992:81-83）によると、知覚対象指示と観念対象指示ではコ系とア系が中心で、ソ系は多用されないのに対して、現場指示と文脈指示においてはソ系が多用される。この結果を受けて、堀口（1978/1992:84）は、自己に関わりが強い身近なものを指す場合はコ、自己に関わりが強い遥かなものを指す場合はア、自己に関わりが弱いものを指す場合はソを用いると結論する。堀口（1978/1992）では、相手の領域を指示するソと中称のソが「自己に関わりが弱いものを指す」機能に統合されている。

正保（1981）は、この堀口（1978/1992）の分類（「現場指示」「知覚対象指示」「文脈指示」「観念対象指示」）を取り入れつつ、ソ系は相手の出現により初めて使われるとし、相手の存在をソ系の使用条件とする。正保（1981:68）は、対立型を「私」と「あなた」によって二分される分極的な構造をなす心理的な場の状況、融合型を「私」と「あなた」のなわばりが重なり合った「われわれ」意識の成り立つ場の状況とする。対立型のソは、話し手が相手の

なわばりに属するものと認定したことを示す「緊張型のソ」とされ、融合型のソは、「われわれ」のなわばりを指す「コ」によって指すには不適當で、「ア」で示すには近すぎるような状況でやむなく使用される「弛緩型のソ」と呼ばれる（同書、p.72）。中称のソは後者に該当する。

「対立型」と「融合型」は、森田（2002:10）によると森田（1968）によって初めて用いられた名称である。森田（1968:77）は、話し手の観念転移に基づく「行く」と「来る」の問題の解明に必要な言語表現の二つの型として「対立型」と「融合型」を識別し、「対立型」を「話し手と聞き手とが別々の立場に立ち、両者の勢力圏にはっきりした境界線が意識される」型とし、「融合型」を「聞き手側の勢力圏は自己の勢力圏でもあるという一体感を持つ型とする。

森田（2002:10）は、森田（1968）とは異なり、まず日本語の言語行為において「a 聞き手を自己とは相対する相手（外の人間）として対応しようとする発話」を「対立型」、「c 聞き手も私と同じ受け手側の存在（内の人間・相棒）と扱い、共通の視点に立つ発話」を「融合型」とする。その後「b 聞き手にとっての“内”の領域が、話し手である「私」の“内”にほぼ重なる状況にあるため、私と対立関係にはあるが、a とは違って、話し手の“内”の側に聞き手も位置する」という「対立型（内）」を付け加え、従来の「対立型」を「対立型（外）」とし、「a 対立型（外）」「b 対立型（内）」「c 融合型」の三つの型を提示する。

森田（2002）において中称のソは「b 対立型（内）」、つまり対立型の一つと見なされる。森田（2002:325）によると、電車の吊り革につかまり立っている二人の一方が、「私たちの前にいるその人、どこかで見たことのある顔だね（強調は原著者による）」と発言するという中称のソに該当する事例では、「その人」について、話し手は“内”に対する意識が聞き手も自分とほぼ同じ視点にある「b 対立型（内）」の理解にたって目の前の座席に座る一人の人間（指示対象）を、“内から外れる存在”ととらえて「ソ」で指示する。自分と相手の座席の向かい側に座っている人物を指すなど指示対象との間に大きな隔たりが意識される場合、自分と相手との対立意識が希薄になり「一つの目と心」へと収斂すると、「c 融合型」へと転成され、「私たちの外」の指示対象として「あの人」とア系で表現される（同書、p.325-326）。

以上のように、対立型（及び「対立型（外）」）のソは概して自分の領域に対立する相手の領域の属するものを指すと解されるのに対して、遠近の間に位置づけられる中称のソに関する見解は多様である。阪田（1971/1992）と正保（1981）は確かに中称のソを自分と相手が領域を共有する融合型とするが、阪田（1971/1992）は正保（1981）ほど相手を対立的に捉えていない。堀口（1978/1992）ではソ系は概して「自己に関わりの弱い」ものを指すとされ、三上（1955/1972）は中称のソを承前詞（照応）として話し手による原点の指定を受けると

する。森田（2002）では中称のソは「対立型（内）」に属し、話し手は相手も自分とほぼ同じ視点にあるとする。

こうした中称のソに関する多様な見解は、原点関与の多様性に帰属すると考えられる。まず中称のソは自分と相手の領域からやや離れた指示対象に適用されることから、融合型に属するといえる。他方中称のソには相手に対する自己抑制や移動的原点の指定といった相手や自分への原点の関与も見られる。また後述するが、平田（2020）は「聞き手の注意の存在」を示す中称のソを指摘している。その反面、「どこそこ」「だれそれ」といった不定称を伴う慣用表現ではソ系の指定機能がほとんど失われている。

この観点から本論文では、上記の先行研究を基に高橋（1956/1992）の場の構成要素を取り入れて、対立型と融合型を（8）のように規定する。

- （8）対立型とは、自分と相手とが二つの焦点に立ち、両者のなわばりに明確な境界線が意識される場の状況であり、融合型とは、相手のなわばりは自分のなわばりであるという一体感を持つ「われわれ」意識の成り立つ場の状況である。

対立型と融合型の場所次元の例としては、まず次のような例が考えられる。

（9a）対立型として考えられる例

自分の場所や自分に近い場所を「ここ」、相手の場所、相手から近い場所を「そこ」、自分からも相手からも遠い場所を「あそこ」で指し示す。

例 「猫はどこにいますか」

「{ここ／そこ／あそこ} にいます」

（金水・木村・田窪 1989:16）

（9b）融合型として考えられる例

自分・相手を含めた「我々（私たち）」のいる場所は「ここ」で表す。自分・相手から少し離れた場所を「そこ」で表す。自分・相手から遠い場所を「あそこ」で表す。

例 「{ここ／そこ／あそこ} にすわりましょう」

（同書、p.16）

（9a）と（9b）の「あそこ」は共に自分と相手の双方にとっての遠方を指す。この点は特に対立型に該当する（9a）において矛盾している。先述の阪田（1971/1992: 66-67）によると、対立型に該当するアは、現場にあるものを指すのではなく、例（10）のように過去を思い出して自分の意識の中にあるものを相手とは関係なく主観的に指す。しかし相手とは関係なく指し示すのが対立型であるならば、堀口（1978/1992）が指摘する「知覚対象指示」、つまり独白・内言で自分から離れた現場の対象を指す例（11）も対立型のア系と認められる。

- (10) お前達が発って行つたのち、日ごと日ごとずつと私の胸をしめつけてゐた、あの悲しみに似たやうな幸福の雰囲気を、私はいまだにはつきりと蘇らせることが出来る。

『風立ちぬ』堀 辰雄（阪田 1971/1992:67）

- (11)（遠方の対象を指して、聞き手に話しかけることなく、独白で）「あれはなんだろう。」

しかし例（10）と（11）が対立型に属するとしても、矛盾は残る。対立型は本来自分と相手の対立を前提とするが、これらの例では相手自体が不要になるからである。また岡村（1972:102-103）が指摘するように、内言・独白において話し手は自分を相手に見立てるという見解も成り立つ。むしろこれらのア系の用法は、相手の領分が没収され自分と領域を共有するという融合型とし、特に相手の存在が希薄な事例として扱う方が順当である。従って本論文では、三上（1955/1972）と同じ立場を取り、対立型としてコとソの用法のみを認めるものとする。融合型に関しては、相手の存在が必ずしも顕著ではない阪田（1971/1992）や堀口（1978/1992）の見解も取り入れ、聞き手との関係を考慮しない距離区分説に歩み寄った立場をとる。対立型と融合型の典型例として（9）を修正した（12）を挙げる。不定称は自分（と相手）にとって不定の対象を示すことから融合型に属するものとする。図1は自分と相手とコソアドの関係を示す。

(12a) 本論文の対立型の典型例：場所次元の場合

自分の場所や自分に近い場所を「ここ」、相手の場所、相手に近い場所を「そこ」で表す。

- ① A：「猫はどこにいますか」 B：（自分に近い場所を指して）「ここにいます」
 ② A：「猫はどこにいますか」 B：（相手に近い場所を指して）「そこにいます」

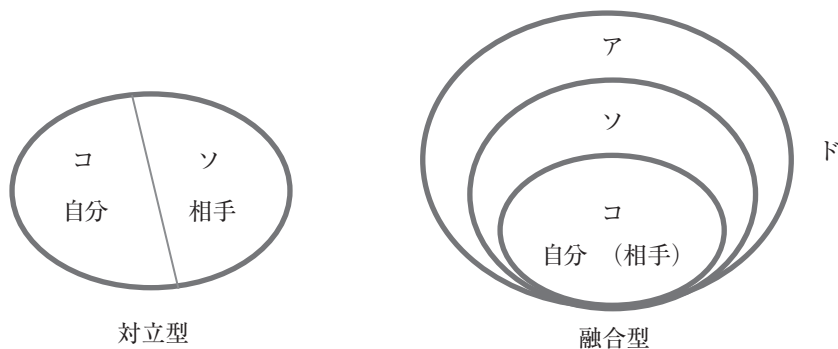


図1 本論文の対立型と融合型

(12b) 本論文の融合型の典型例：場所次元の場合

自分（・相手を含めた「我々（私たち）」）のいる場所は「ここ」で表す。自分（・相手）から少し離れた場所を「そこ」で表す。自分（・相手）から遠い場所を「あそこ」で表す。自分（・相手）にとって不定の場所を「どこ」で表す。

- ①（自分（・相手）のいる場所を指して）「ここにすわりましょう」
- ②（自分（・相手）から少し離れた場所を指して）「そこにすわりましょう」
- ③（自分（・相手）から遠い場所を指して）「あそこにすわりましょう」
- ④ A：「どこにすわりましょうか」 B：「どこでもかまいませんよ」

本論文において、融合型は対立型に比して豊富な下位範疇を包括し、対立型は自分と相手の対立に特化される。従って対立型と融合型の対立は近称においてのみ存在する。

4.2.2 中称のソと原点の関与

4.2.1 では、中称のソをわれわれの領域から少し離れた対象を指すことから融合型とし、それに伴い対立型と融合型を定義した。中称のソを巡る多様な見解は、原点関与の多様性に帰せられる。ここでは中称のソに関する原点関与として、「相手の注意の存在」と「移動的
原点指定（照応）」、「指示力の低下した指示」を挙げる。

平田（2020）は、相手の注意の存在を示す中称のソとして例（13）を挙げる。01でAは当該の森の位置を「あそこ」で指し、02でBがその方向に顔を向けたのを受けて、03で同じ対象を「そこ」で示す。その後04でBが「あの」で指した対象をAは05で「それ」で示す。このように03と05でAは本来ア系で指示するような遠方の対象にソ系を用いている。

(13) 相手の注意の存在

（AとBが展望台の窓の前の隣り合ったいすに座り、正面に広がる景色を見ている。Aは
共通の友人が住んでいるビルの場所をBに教えようとする）

- 01 A：あそこ見て 斜めに森あるでしょ
| 左手で指さし
- 02 B：（Aの指さしに合わせて顔を動かす）
- 03 A：その裏 白黒のゼブラ柄のビル ゼブラ柄の
| 指さしを継続
- 04 B：え どれどれ？ あの鉄塔が近いやつ
| 右手で指さし

05 A : (Bの方を見た後、正面に顔を戻し) それぞれ

|左手で指さし

(平田 2020:49 強調は原著者による)

平田 (2020:51) は、03 と 05 に現れるソを「発話時に聞き手の視覚的注意が既に向けられていることを前提とする『聞き手の注意の存在』を示す形式」とする。これらのソの指示対象は、確かに自分と相手からほぼ同位置にありながら、指示対象に相手の注意が存在する、つまり指示対象に相手の原点が関与すると考えられる。この点で、相手の注意が存在する中称のソには、相手の領域に属する対立型のソとある種の連続性が見いだされる。

「移動的原点指定（照応）」としては次の例 (14) が挙げられる。これは漫画のナレーション部分で、移行する原点が絵によって具象化されている。(a) の「そこ」は後述の「デスノート」を指す後方照応で、コマには当該の「デスノート」が描かれている。(b) の「それ」は (a) の「デスノート」を指す前方照応で、コマにはそのノートに名前を書いている登場人物「夜神 月」の姿が描かれている。(c) の「それ」は 02 の「夜神 月」の行動を指す前方照応で、コマにはその「夜神 月」の姿を眺めながら横になっている「死神 リューク」の姿が描かれている。

(14) 移動的原点指定（照応）

(a) そこに / 名前を書かれた者は / 死んでしまう / デスノート //

(b) それを 武器に / 世の中の悪を一掃すると / 決心した少年 / 夜神 月 //

(c) そして それを / ただ傍観している様な / デスノートの提供者 / 死神 リューク //

(『デスノート』 p.53 強調は本論文著者による)

これらの照応の指示場は作者と読者のいる現場ではなくコマに描かれた状況であり、(a) の指示場の中心（原点）は「デスノート」、(b) は「夜神 月」、(c) は「死神 リューク」である。そして照応のダイクシス対象は先行及び後続のテキストの語句であり、意図される指示対象は指示場であるコマに描かれた対象である。すると (a) の「そこ」は原点「デスノート」を先取りし、(b) の「それ」は (a) の原点「デスノート」を指しつつ新たな原点「夜神 月」を導入し、(c) の「それ」は (b) の原点「夜神 月」を指しつつ更なる原点「死神 リューク」を導入していることがわかる。このように照応のソは常に移り変わる原点を

19) 漫画『デスノート』のナレーションや会話文は、枠内に収められ句読点は用いられていない。そのため改行を「/」、枠の分割を「//」で表示した。またふりがなは全て省略した。

指定する²⁰⁾。従って移動的原点指定(照応)のソは、コとアの対立に見られる遠近を超越する。これはまさに三上(1955/1972)の指摘する中和中立の中称である。

移動的原点指定(照応)は、先述の「相手の注意の存在」を示す用法とは一見全く異なるように見えるが、類似する現象も見られる。次の会話例の「そこ」は自分の発言の先行内容「死因を…死ぬ」を指すが、発言の際に相手を指さして注意を引きつけている。

- (15) 死因を書かなければ / 皆 心臓麻痺で死ぬ // そこが / デスノートの / 一番いいところだよ / リューク
(『デスノート』 p.46 強調は本論文著者による)

このように原点移動指定は先行文脈の中心に相手の注意を引きつける場合もある。先行内容が相手の領域にあるという見解は佐久間(1983:24)にも見られるが、この相手の注意を引きつける機能は、逆説的な展開を前にして先行するテキスト的意味に注目させるソの用法にも活かされている。庵(2019:111)は、文脈指示用法の指定指示で用いられる「この」と「その」を比較した結果、「その」しか用いられないケースとして例(16)を挙げる。

- (16) (a) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。
(b) {その / # この / # の} 順子が今は他の男の子供を二人も産んでいる²¹⁾。
(庵 2019:111)

庵(2019:111)によると、例(16)の『『その』を含む文で述べられる内容は通常先行文脈で形成される予測を裏切る内容となっている」。この予測裏切り性には、先行する原点を指しつつそれとは異なる新たな原点を導入するという照応の機能が最大限に発揮されている。同様の意味機能は、「それが、それを、それなのに、それにもかかわらず」等のソ系の多くの接続詞表現にも見られる(同書、pp. 215-233)が、これもまた照応機能の現れといえよう。

中称のソの移動的原点指定(照応)の用法には、先行する原点の指定(前方照応)と後続の原点の先取り(後方照応)が存在する。前方照応の場合は、先行する原点を中称のソで指示することにより、そのダイクシス対象はそれまでの原点として注目されると同時に、やや離れた直後の内容に新たな原点の存在を予測させる。後方照応は原点の先取りで日本語では前方照応に比して稀であるが、いずれも直後に原点を導入するという点では一致している。

20) Diewald(1991:117-121)は照応(Textphorik)をテキスト内のプロセスであり、発話コンテキストには依存しないものとしてダイクシスから除外しているが、本論文では原点からダイクシス対象への方向関係が認められることから、ダイクシスに属するものとする。

21) 庵(2019:25)によると、#は非結束性を表す。

なお大野（1978:74）は、小説の冒頭で用いられるソ系を「読者を小説の舞台の中にただちに引き入れる工夫」であるとするが、このソ系は前方照応を踏まえた用法と見なされている。

「指示力の低下した指示」としては例（17）が挙げられる。三上（1955/1972:181）によると、対象を探す意向を含まない不定称「ドレカ／ダレカ」は、疑問称とは異なり、指示作用の低下した中称のソと結合して（17a）のような慣用表現となる。例（17b）は岡村（1972:112）のよるソの例で、「そこ」は相手にわかるとしき場所を暗示しつつも特定の場所ではなく漠然とした領域を指示することから、指示作用が低下した用法と見なされる。

（17）指示力の低下した指示

（17a）ダレソレ、ドコソコ（三上 1955/1972:181）

（17b）A「まあ、お久しぶり。どちらへお出かけ？」

B「いえ、ちょっとそこまでなんですが、……。省略」（岡村 1972:112）

このように、中称のソには程度の差こそあれ原点が関与する。以上のことから本論文では、指示関係を（18）のように分類する。次節ではこの原点からの距離による区分に加え、次元ごとに対立型と融合型の区分を検討する。

（18）指示関係は「原点含有段階」と「原点非含有段階」に大別される。「原点含有段階」は原点を内包する「近称」と原点が段階的に関与する「中称」に分けられ、そのうち「近称」は自分に原点が置かれる「H称」と相手に原点が置かれる「A称」に分けられる。「原点非含有段階」は原点を含まない領域の特定の対象を示す「遠称」と不特定の対象を示す「不定称」に分けられる。さらに指示関係には、原点による下位分類とは別に、自分と相手との関係に基づく対立型と融合型の区別がある。

4.3 各次元に基づく分類

4.3.1 場所次元

場所次元には対立型と融合型があり、先述の（12a）と（12b）のコソアドの説明と具体例を（18）で規定した指示関係に照合させると、対立型（12a）の「ここ」は近称のうち自分の領域を表すことから自分に原点がおかれるH称、「そこ」は相手の領域を表すことから相手に原点がおかれるA称に該当する。融合型（12b）の「ここ」は自分（と相手）の領域であり、H称とA称を統合した「近称」に該当する。「あそこ」は自分（と相手）の領域外の原点非含有段階で遠い領域を示す「遠称」、「どこ」は原点非含有段階で不定の領域を示す「不定称」となる。（12b）の「そこ」は自分と相手の領域外ではあるが、既に例（13）、（14）、

(15), (17) で示したように、段階的に原点が関与することから、原点含有段階の「中称」に位置づけられる。

4.3.2 時間次元

時間次元では自分と相手が時を共有するため、融合型のみが適用される。Lyons (1977:684) によると、ここで現在行われている発話、例えば *It is raining here now* において、「ここ here」という場所については自分と相手が各自異なる場所を指しうるが、「今 now」という時は共有される。従って「今」をはじめとして発話時という原点を含む語彙「今日、今月、今年」などはH称とA称を含む融合型の「近称」となる。「今」を含まない語彙「昨日、明日、先月、来月、去年、来年」などは、現時点の投影や歴史的現在等のように原点が関与すれば「中称」と見なされ、「今」と隔絶された過去と捉えられれば「遠称」と判断することができる。

時を表すコソアに関しては、田口 (2013:310) も指摘するように、堀口 (1978/92:89) が「絶対指示」の枠組みで扱う。「絶対指示」とは「場所・時間に関するもので、常に特定の対象を絶対的に指示する用法」であり、時間表現は、「これまで、これから、このごろ」などの近称のみであるとされる。この観点から田口 (2013) は時間表現としてコ系のみを取り上げ、「この一年、この一週間」等のコ系のカレンダー用法（「このN」）と「今（こん）+N」の使い分けを分析し、前者が純粋な時間量を表し、後者が暦の上で設定された時間単位であるとする。

上記のコ系の時間表現は発話時を含む時間帯を示すが、対応するソ系、ア系、ド系の表現は乏しい。田口 (2013:310) が金 (2004) に依拠して指摘する通り、「このごろ」に対応するソ系（*「そのごろ」）とア系（*「あのごろ」）は存在しない。ソ系の「それまで」は先行文脈の時点までという照応の意味で、必ずしも発話時から比較的近い時とは限らない。「それから」は時間的表現としてではなく接続詞として頻繁に用いられる。ア系の「あれから」は現在から隔絶された過去の時を基準にその後の時を表すが、「これまで」に対応する表現は無い。ド系に関しては「これまで、これから、このごろ」のいずれも対応する表現は無い。

またコ系の時間表現は必ずしも発話時を含むとは限らない。例えば「父は、旅行先で事故にあって生死に境をさまよった。この時、私はまだ母のおなかの中にいた」（金水・木村・田窪 1989:34）の「この時」は発話時ではなく、父親が生死の境をさまよっていた先行文脈の時を表す。

従って、時間次元は融合型のみで、部分的な分布を示すコソアの中ではコが優勢であるといえる。

4.3.3 人称次元

1.1.2の(4)で規定したように本論文の「人称」は発話に関する役割を基準とする。井出(1958)と岡村(1972)が人代名詞とともに「人」の範疇とする「このかた、そのかた」等は話題となる人物を指すが、発話を担う役割による弁別ではないため人称次元から除外する。また鈴木(1973)は自分を指す自称詞と相手を指す対称詞に親族名称や職業名も含めるが、ここでは話の役割に特化された「わたし」や「あなた」等の代名詞に限定する。

単数の場合、「わたし」(古語ではワレ)等の代名詞は発話を担う役割を果たす自分を指すことから、自分に原点が置かれるH称、「あなた」(古語ではナレ)等の代名詞は発話を受信する役割を果たす相手を指すことから、相手に原点が置かれるA称に分類される。これらの近称はH称とA称に区分されるので対立型である。原点の導入により対立型に複数を受け入れることができる。つまり自分を中心とし相手を含まない「わたしたち」等は自分を原点とするH称に、相手を中心とする「あなたたち」等はA称に分類される。

相手を含む複数の「わたしたち」は融合型に属する。大野(1978:77)によると、日本人は、「我」と「汝」を「仕手と受け手の関係」としてではなく、「基本的に共同の場で」「同じ感覚を持って事態に対処してゆくウチなる存在」としてとらえる結果、「我」と「汝」の細かい位置づけに対応する多くの呼び名がある。この点は親族名称や職業名が自称詞や対称詞に用いられるという鈴木(1973)の指摘にも通じる。また日本語には、古語の「うぬ」「おのれ」を相手に対して用い、現代では子供に「ほく」と呼びかけるなど、一人称の二人称への転用も見られる(同書、p.78)。こうした転用も人称次元の融合型の局面を示している。

三人称代名詞としては現代語の「彼、彼女」と古語の「カレ」が挙げられる。奥村(1954:64)によると、古語の「カレ」は万葉時代に遠称代名詞として使用されているが、現代語の「彼」は明治以降によく現れる。また奥村(1954:71-74)は、それまでは三人称代名詞として「こいつ、そいつ、あいつ」等のコソア表現が用いられていたが、英語の he, she の翻訳をきっかけに文章語において名詞の繰り返しを避けるために遠近とは無関係な「彼、彼女」が導入されたとする。現代語の「彼、彼女」は、この遠近とは無関係という点で三上(1955/1972)の指摘する「中和中立の中称」に該当する。また一見原点の関与はないかのように思われるが、物語においては「彼、彼女」が指示場の中心となり、場の移動に関わることがある。次の例の物語の場は、「彼」の移動に従って、窓際から自分の寝室、秘書の寝室へと移行する。

(19) ルドルフ・ケッセルバックは、心配げな様子でそこらを歩きまわった。(中略)

彼は窓に近づいてみた。窓は閉まっていた。たとい閉まっていなくても、窓からここへ忍び込むことは出来ないはずだった。(中略)

彼は自分の寝室へ入った。この部屋には隣接の他室からの連絡は全くなかった。彼は秘

書の寝室に入ってみた。

(『813』 p.10 強調は本論文著者による)

以上のことから、現代語の「彼、彼女」は中称に、古語の「カレ」は遠称に分類する。

不定称としては、古語の「タレ」と現代語の「だれ」が挙げられる。

人称次元に属するコソアとしては、「こっち／そっち／あっち」の用法がある。金水・木村・田窪 (1989:27) は、「こっち」は自分、「そっち」は相手、「あっち」は自分と相手との間でいま話題になっていて、会話の場にはいない人を指し示す」用法として、次の例を挙げる。

(20a) 「**そっち** (= きみ) にはずいぶん迷惑をかけたね」

「いや、**こっち** (= わたし)こそ」

(20b) **あっち** (= 話題の人) がその気なら、**こっち** (= わたし) にも考えがある。

(金水・木村・田窪 1989:27 強調は原著者による)

例 (20) の「こっち、そっち、あっち」は発話の役割による弁別であるため、人称次元と見なされる。(20b) の「あっち」は会話の場から隔てられているため、遠称と見なされる。また「こっち」は状況が変われば相手を含む「われわれ」と言う意味でも用いることが出来るので、融合型の近称としても適用される。それぞれ敬語的な表現として「こちら、そちら、あちら」も用いられる。話し手を指す「こちら」の用法については、既に金井 (2005) がその使用条件として「そちら」で示される聞き手との対立関係を指摘しているが、(20b) では「こっち」と「あっち」の対立が見られる。このように人称次元のコソアには、三上 (1955/1972) が指摘するコ対ソとコ対アの対立関係が基盤にあると考えられる。

不定称の用法はコソアよりさらに制限されている。例 (21) のように「どちら(様)」は「だれ、どなた」という意味で用いられるが、この文脈で「どっち」は用いられない。

(21) あまり自信のないときは、はっきりと「失礼ですが、どちら様でいらっしゃいますか」と尋ねるのがいいでしょう。(強調は本論文著者による)

(太田 颯衣『すてきな女性のイキイキ仕事術』 PHP 研究所 2001 年) ²²⁾

4.4 再構築されるダイクシス表現の分類表とその解説

以上の検討の結果、原点による下位分類である原点含有段階 (近称〈H称、A称〉、中称) と原点非含有段階 (遠称、不定称) 及び自分と相手の関係による下位分類である対立型と融

²²⁾ 例 (21) は、現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> (2023/9/20 にアクセス) より引用した。

合型という二重の指示関係により、人称は、場所・時間と共に次元として分類することができる。なお三上（1955/1972）とは異なり、中称との関連と原点の段階的な関与を考慮し、相手を中心とする A 称は自分を中心とする H 称の後に位置づけた。また表記上、コソアドと古語はカタカナで、それ以外は平仮名と漢字で区別した。

次元	指示関係	原点含有段階（求心的）		原点非含有段階（離心的）		
		近称		中称	遠称	不定称
		H 称	A 称			
場所次元	対立型	ココ	ソコ			
	融合型	ココ		ソコ	アソコ	ドコ
時間次元	融合型	コノゴロ、コレカラ 「コノ N」（「コノ一年」）		（ソ）	（ア）アレカラ	
		今、今日、今月		昨日、明日、先月、来月	いつ	
人称次元	対立型	コッチ コチラ	ソッチ ソチラ			
		わたし等 ワレ（古語） わたしたち （相手を含まない）	あなた等 ナレ（古語） あなたたち			
	融合型	コッチ コチラ（相手を含む）			アッチ アチラ	ドチラ
		わたしたち等（相手を含む） おのれ、ぼく（相手を指す）		彼（現代語）、彼女	カレ（古語）	どなた、だれ タレ（古語）

表9 本論文のダイクシス表現の分類

表の効率からいえば、佐久間（1983）と同様の手法により対立型と融合型は別の表にすべきところではあるが、ここでは次元と指示関係全般を概観するために一つにまとめた。完成した表9を概観すると、対立型と融合型の双方が見られるのは場所次元と人称次元であり、時間次元は融合型に限定され語彙も乏しい。また融合型は対立型に比して、原点による指示関係の下位範疇と次元のいずれにおいても包括的である。この点は、日本人は自分と相手を共同のウチなる存在と見なすという大野（1978:77）の見解を支持する結果となった。また原点による二段階の弁別により、佐久間（1983）の表2には無かった人称とコソアの共通点も明示された。

5. まとめと今後の課題

本論文では、先行研究における人称の位置づけの相違の要因を解明するとともに、原点に基づく指示関係の分類により人称を指示対象の属性である次元とし、三上（1955/1972）で

は除外された対立型と融合型、中称、時間次元を含むダイクシス表現の分類を再構築した。

今後の課題として特に重要なのが中称の用法の分析とその位置づけである。本論文では相手の注意の存在、移動的原点指定や、指示力なき指定といった原点の関与が認められることから中称を融合型の原点含有段階に位置づけたが、今後の分析結果によっては変更を要する。また今回は伝統的な範疇とされる場所次元、時間次元、人称次元に限定したが、Diewald (1991) がア・プリオリの観点から次元を増設したように、研究対象に応じて他の次元も導入することもでき、また次元間の比較や次元に基づく対照研究も可能である。こうした中称と次元のさらなる検討を今後の課題としたい。

【引用文出典・URL】

大場つぐみ（原作）・小畑健（漫画）（2004）：『DEATH NOTE デスノート』第一巻 集英社
現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>（2023/9/20
にアクセス）

ルブラン、モーリス（1959）（堀口大学訳）：『813 ールパン傑作集 Iー』新潮社

【主要参考文献】

- 庵功雄（2019）：『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』ひつじ書房
- 井出至（1958）：「代名詞」『続日本文法講座 I 文法各論編』pp.111-133. 明治書院
- 大野晋（1978）：『日本語の文法を考える』岩波書店
- 岡村和江（1972）：「代名詞とは何か」『品詞別日本文法講座 2 名詞・代名詞』pp.79-121. 明治書院
- 小川典子（2013）：「指示詞における「対立型」「融合型」とは何か」『言語の創発と身体性』pp.265-277. ひつじ書房
- 奥村恒哉（1954）：「代名詞「彼、彼女、彼等」の考察 ―その成立と文語口語―」『国語国文』23-11, pp.79（591）-78（606）. 京都大学文学部国語国文学研究室
- 金井勇人（2005）：「〈話し手〉を指す「こちら」の 2 用法」『国語学研究と資料』28 pp.37-47. 国語学研究と資料の会
- 金善美：「現場指示と直示の象徴的用法の関係 ―日韓対照研究の観点から―」『日本語文法』4（1）：pp.3-21. 日本語文法学会
- 木村英樹（1992）：「中国語指示詞の「遠近」対立について ―「コソア」との対照を兼ねて」、大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』pp.181-211. くろしお出版
- 金水敏・木村英樹・田窪行則（1989）：『日本語文法 セルフマスターシリーズ 4 指示詞』くろしお出版.
- 金水敏・田窪行則（編）（1992）：『指示詞』ひつじ書房.
- 児玉一宏・小山哲春（編）（2013）：『言語の創発と身体性』ひつじ書房
- 阪田雪子（1971/1992）：「指示語『コ・ソ・ア』の機能について」『指示詞』pp.54-68.（底本：『東京外

- 国語大学論集』21 pp.125-138. 東京外国語大学 1971)
- 正保勇 (1981): 「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』pp.51-122. 国立国語研究所
- 鈴木孝夫 (1973): 『ことばと文化』岩波書店
- 高橋太郎 (1956/1992): 「「場面」と「場」」『指示詞』pp.38-46. (底本『国語国文』25-9、pp.53 (591) -61 (599). 京都大学文学部国語国文学研究室 1956)
- 瀧田恵巳 (2005): 「ダイクシス体系におけるドイツ語指示詞の位置づけと分類について —Diewald (1991) による her と hin 及びその二重不変化詞の分類を例に一」『言語文化共同研究プロジェクト 2004: 言語における時空を巡ってⅢ』pp.21-30. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 瀧田恵巳 (2017a): 「人称と言語オルガノン・モデル」『言語文化研究 43 号』pp.97-118. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 瀧田恵巳 (2017b): 「コソアの意味記述と人称—「一人称」と「二人称」は「三人称」か?—」『言語文化共同研究プロジェクト 2016・時空と認知の言語学Ⅵ』pp.21-30. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 瀧田恵巳 (2022): 「指示詞の体系を構成する二つの意味基準について」『言語文化共同研究プロジェクト 2021・時空と認知の言語学Ⅺ』pp.19-28. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 田口慎也 (2013): 「近称指示詞の時間表現とカレンダー用法—「この + N」と「今 (こん) + N」の比較を中心に—」『言語の創発と身体性』pp.309-321. ひつじ書房
- 時枝誠記 (1941/2007): 『国語学原論 (上) [全 2 冊]』岩波書店 (底本: 『国語学原論』岩波書店、1941)
- 永野賢 (1949): 「言葉の使ひわけに關する基本問題」『国語と国文学』pp.53-60. 明治書院
- 仁田義雄 (1991): 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- バンヴェニスト、E. (1983) (岸本通夫監訳): 『一般言語学の諸問題』みすず書房
- 平田未季 (2020): 『共同注意場面による日本語指示詞の研究』ひつじ書房
- 古田東朔 (1980/1992): 「コソアド研究の流れ (一)」『指示詞』pp.7-31. (底本: 『人文科学科紀要』71, pp.119-156. 東京大学教養学部人文科学科 1980)
- 堀口和吉 (1978/1992): 「指示語の表現性」『指示詞』pp.74-90. (底本: 『日本語・日本文化』8、pp.23-44. 大阪外国語大学 1978)
- 三上章 (1955/1972): 『現代語法新説』くろしお出版 1972 (底本: 『現代語法新説』刀江書院 1955)
- 三上章 (1970): 「コソアド抄」『文法小論集』pp.145-154. くろしお出版
- 森田良行 (1968): 「『行く・来る』の用法」『国語学』第 75 集 pp.75-87. 日本語学会
- 森田良行 (2002): 『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 山田孝雄 (1908): 『日本文法論』宝文館
- 渡辺伸治 (2009): 「ダイクシスの定義と下位分類」『言語文化研究』第 35 号 pp.161-178. 大阪大学大学院言語文化研究科

- Bühler, Karl (1934/1982): *Sprachtheorie: Die Darstellungsfunktion der Sprache*. Stuttgart, New York: Fischer, 1982 (Nachdruck von 1934). (脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳『言語理論 言語の叙述機能 上巻』クロノス、1983、脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子・杉谷眞佐子共訳『言語理論 言語の叙述機能 下巻』クロノス、1985.)
- Diewald, Gabriele Maria (1991): *Deixis und Textsorten im Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.
- Fillmore, C.J.(1966):Deictic Categories in the Semantics of 'Come'. In: *Foundations of Language* 2, pp.219-227.
- Fillmore, C.J.(1972): Ansätze zu einer Theorie der Deixis. In: Kiefer, F. (Hg.), *Semantik und generative Grammatik*, Frankfurt/M.:Athenäum, pp.147-174.
- Fillmore, C.J.(1997): *Lectures on Deixis* (CSLI Lecture Notes 65). California: CSLI Publication, Stanford.
- Fricke, Ellen (2007): *Origo, Geste und Raum: Lokaldeixis im Deutschen*. Berlin, New York: Walter de Gruyter.
- Lyons, John (1977): *Semantics. Volume 2*. London, New York, New Rochelle, Melbourne, Sydney: Cambridge.
- Sennholz, Klaus (1985): *Grundzüge der Deixis*. Bochum: Brockmeyer.
- Weinreich, Uriel (1963): On the Semantic Structure of Language. In: Joseph Greenberg(Hg.), *Universals of Language: Report of a Conference Held at Dobbs Ferry New York April 13-15 1961*, Cambridge, Massachusetts: M. I. T. Press, pp.114-171.

Über die Position der Person in der Klassifikation der deiktischen Ausdrücke

Emi TAKITA

Zusammenfassung

Dieser Aufsatz behandelt das Klassifikationssystem der deiktischen Ausdrücke, vor allem die Position der Person.

Japanische deiktische Ausdrücke mit *ko-*, *so-*, *a-*, *do-* werden nach zwei semantischen Kriterien klassifiziert. Eins der Kriterien ist nämlich der deiktische Bezug, die Beziehung zwischen dem Sender (und/oder dem Empfänger) und dem Referenten. Das andere Kriterium zeigt die Eigenschaft des Referenten wie Ort, Ding usw. Beide Kriterien bilden zusammen eine Matrix-Tabelle, wie in Sakuma (1983), Ide (1958), Okamura (1972) und Mikami (1955/1972).

Diese Kriterien und die Matrix-Tabellen können dazu verwendet werden, um auch deiktische Ausdrücke anderer Sprachen zu klassifizieren: Eine Matrix-Tabelle wird für die kontrastive Forschung (chinesisch-japanisch) von Kimura (1992) verwendet. Sennholz (1985) zeigt eine Matrix-Tabelle und klassifiziert darin deutsche deiktische Ausdrücke nach den Untergruppen „Autodeixis“ und „Heterodeixis“ des deiktischen Bezugs „Relationstyp“ einerseits und nach den Untergruppen „Lokaldeixis“, „Zeitdeixis“ und „Personaldeixis“ der Eigenschaft des Referenten namens „Dimension“ andererseits. Die nennenden Komponenten des Deixisprozesses von Diewald (1991), d.h. „Entfernung“ und „Dimension“ betreffen den deiktischen Bezug und die Eigenschaft des Referenten.

Die Person gehört dabei einerseits zum Deixisbezug wie in Ide (1958) und Okamura (1972), andererseits zur Eigenschaft des Referenten wie in Sennholz (1985) und Diewald (1991).

Diese Arbeit erörtert, was dieser Unterschied verursacht und kommt zum Ergebnis, dass der deiktische Bezug nicht in die Personalgruppen, die erste Person, die zweite Person und die dritte Person geteilt werden sollte, sondern in die origoinklusive Stufe und die origoexklusive. Daraufhin lässt sich ein neues Klassifikationssystem bilden.